

コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2022年9月22日

JAMA:この冬にインフルエンザと新型コロナの「Twindemicツインデミック」は起きるか？

【松崎雑感】

答：

どうなるかわからないから、インフルエンザワクチン接種をしっかりとやりましょう。

この冬にインフルエンザと新型コロナの「Twindemicツインデミック」は起きるか？

Rubin R. **The Dreaded "Twindemic" of Influenza and COVID-19 Has Not Yet Materialized-Might This Be the Year?** [published online ahead of print, 2022 Sep 21]. **JAMA. 2022;10.1001/jama.2022.15062.**
doi:10.1001/jama.2022.15062

疫学専門家マイケル・オスターホルム氏は、インフルエンザの流行レベルを予測することは、台風が5日後にどこに襲来するかをピンポイントで予測することに等しい難しさがあると述べた。

ミネソタ大学の感染症研究製作センター所長のオスターホルム氏は「台風でもそうだが、インフルエンザも予期しない動きをすることが多い。インフルエンザも相当流行するという前提で備える必要がある」と語った。

南半球の温帯地域オーストラリアでは通常4～9月にインフルエンザが流行するが、国立アレルギー感染症研究所のファウチ所長をはじめとした専門家は、ことしのオーストラリアのインフルエンザ流行状況が米国のインフルエンザ流行の予測に役立つだろうと考えている。

オーストラリアでは、最近5年間で最も早く、最も多くのインフルエンザ患者が発生した。大人よりも小児に多く流行しているという。

今年のオーストラリアのインフルエンザ患者数は非常に多いが、入院、自宅待機、欠席数はそれほど多くなかったという。流行は早かったが患者数のピークは例年より低かったという。

オーストラリアのインフルエンザ流行状況を基に、米国の流行の度合いを予測することは、それはそれで妥当だが、同じ橋上になるとは限らないと、WHO協力センターの野生動物インフルエンザエコロジー部門代表のウイルス学者リチャード・ウェビー氏は語った。

メンフィスのセントジュード小児研究病院のウェビー氏も「インフルエンザが大流行するとは思われない」と語った。

「ファンキーなインフルエンザシーズン」

2021－2022年のインフルエンザ流行が激しくなると予測した専門家も少なくなかった。しかし新型コロナパンデミック襲来後の最初のインフルエンザシーズンの患者数はほとんど「ゼロ」に近かった。

新型コロナ対策としての3密防止とマスク着用が効果を上げたと考える専門家が多かった。

しかし、コロナパンデミックの最初の1年半で、インフルエンザへの免疫が低下した。通勤通学が元に戻り、感染防止対策も撤廃され、2021－22年（北半球では昨冬から今春）のインフルエンザ流行の下地作りが完了したため、インフルエンザと新型コロナのダブルパンデミックが必至だとおそれられたが、そのようにはならなかった。

CDCは21－22年のインフルエンザ流行は、新型コロナパンデミック前よりも小さかったと報告している。「新型コロナ対策によりインフルエンザ流行が抑えられたのだろう」と報告されている。

しかし、新型コロナ予防対策をほとんど行っていない国でも、インフルエンザ流行は少なかったとオスターホルム氏は述べた。

彼は「呼吸器感染症ウイルスがどのような動きをするか、そのメカニズムについて、われわれはほとんど知らない、という状態にあることが分かった」と述べた。

CDC報告書の共著者リネット・ブラマー氏は、長年インフルエンザ流行を研究した末に、予測できないことが起こるという結論を得ている。

「予測不能なのだ。予想したとおりにならなくとも、驚くにはあたらない。多くが流行するだろうと予測した去年は、流行しなかった」とCDCインフルエンザ部門国内インフルエンザサーベイランス主任ブラマー氏は述べている。

米国のインフルエンザは例年通り昨年10月に流行が始まり、12月末にピークに達した。流行は今年の1月前半に終わったが、これは例年より早い。学校が休みとなったためだろうとブラマー氏は考えている。

「しかし学校が始まっても、2月中旬から下旬に多い再流行はあまり起きなかった」と彼女は語った。

この冬のインフルエンザ流行はどうかについて、バンダービルト大学感染症専門家ウィリアム・シャフナー氏は冗談交じりに、本誌に「科学的な用語を使うなら、“ファンキー”だ」と答えた。（ファンキー：型破り、一定しない：松崎）

もちろん「ファンキー」は科学辞書にない。

しかし前の冬のインフルエンザ状況は「予想外」だった。この1月前半は、インフルエンザが大流行しそうな様相だったが、案に相違して鎮まると、シャフナー氏は語った。彼は国立感染症基金とその協力組織であるCDCワクチン対策諮問委員会の医学主任である。

インフルエンザが3～5月に再燃した地域もあった。これまではインフルエンザ流行のピークは年1回だが、2回目のピークが現れる場合は別の株の流行だった。もちろん前の冬の2回のピークはいずれもA型（H3N2）でわずかに違う（little bit odd）派生株だったが、odd（奇妙な）振る舞いをするのがインフルエンザの常である。

シャフナー氏は、その後数か月インフルエンザがくすぶり、米国では6月に数千人がインフルエンザで入院したことがCDCの調査で示されているを指摘して、「このだらだらした流行は、今までにない現象だ」と彼は述べた。

オミクロン対インフルエンザ

2022年1月にインフルエンザが減少していた時期にオミクロン株の流行が増加していた。

シャフナー氏は、「これはウイルス干渉という現象なのだろうか」と述べた。

ウェビー氏は、同時に呼吸器に感染するウイルスが二種類流行することはほとんどないunusualと述べている。

極めて感染力の強いオミクロン派生株が、「未知のプロセスでインフルエンザ流行を阻止したとしか考えられない。考えられるプロセスは、あるウイルスに感染した場合、ほかのウイルスに対する免疫も賦活されるから、別のウイルスの感染が阻止されるのではないかということだ。オミクロン流行の陰で、インフルエンザウイルスは感染相手を探すことができなくなっているのかもしれない」と彼は述べている。

ワクチン

米国では、この冬に1億8千万回分のインフルエンザワクチンが製造されるとCDCは発表している。昨冬は1億9380万回分だった。

CDCの予防接種諮問委員会によれば、インフルエンザワクチンの組成は、予想される流行株で決められるが、65才以上の人々には、感染予防効果を高めるために高容量でアジュバントを加えた強化ワクチン (quadrivalent high-dose inactivated influenza vaccine (HD-IIV4), quadrivalent recombinant influenza vaccine (RIV4), or quadrivalent adjuvanted inactivated influenza vaccine (aIIV4)) 接種を勧めるよう勧告している。

これらの強化ワクチンのいずれも接種できない場合は通常のインフルエンザワクチンを接種することになる。

この2年間、インフルエンザがあまり流行しなかったとはいえ、シャフナー氏は、「インフルエンザワクチン接種が大事だという事を強調したい。

現状では、インフルエンザを押さえるに十分なワクチン接種率となっていない」と語った。

事実、18歳以上の人々へのワクチン接種率は、一昨年よりも昨年の方が減っている。昨冬にインフルエンザワクチンを受けた成人の比率は45.4%に留まっている（CDCデータ）。

ワクチン製造に時間がかかるため、数か月前のデータでインフルエンザワクチンの組成が決定され、量産が始まる。

しばしば、数か月前に決められたワクチン組成が現実の流行株に合わなくなることもある。

しかし、今年は、「現在のところ、ワクチン組成に合致した予想通りの流行が起きているように思える」とウェビー氏は語った。